

近くまで来ると、岩の上に、裸のまま、ぼーんと飛び出してきた。びっくりしていると、女が手を振って叫んだ。

「あんちゅんー！」

その声に聞き覚えがある……。

ふと笑いのようなものが、安珍の喉の奥から、込み上げて来る……。

……まだ、少女だ。

真砂の庄司 清重の娘……清姫……。

安珍が、最後に、この真砂の郷に来たのは、二年前だ。

そういえば、あの時も、この岩田川で、清姫は安珍と裸になって水浴びをした。

それは、楽しい時間だったけれど、安珍にとっては、ただ子どものお守をしているにすぎなかった。

清姫は、あのとときと全く同じ気持ちのまま、安珍の前に飛び出してきたものらしい。

……しかし、容姿は、まったく変わっている。

身長は、一尺以上は伸びているだろう。

未成熟な……やせっぽちの身体は、しかし、かすかな丸みを帯び……そこから伸びたすらりとした細い脚が眩しい。

「姫様あ〜！」

川縁の砂利の中を中年の女が走ってくる。女に見覚えがある。

清姫の乳母、ハツだ。

ハツは、頭を安珍の方に下げ挨拶をすると、そのまま、清姫の方に走り寄って行く。

「もう……これ！水遊びではないのですよ……。はやく、お着物をお召し下され。」

はいはい……と言いながら、清姫は、いたずらっ子の様に笑った。そして、そのまま、再び、水の中に飛び込む。

その表情は、二年前の子どものままだ……。

清姫の姿は、あつというまに消え、しばらくしてから、はるかむこうの水の上に、ひよっこりと顔をみせた。

また、こちらに向かって手を振っている。

ハツはあきれたという表情で、それを見守っている。

そして、「しかたがないでしょう……？」と言いたげに、安珍の方を振り返る……その唇の端が少し笑っている……。